

# はじめに

本書でご紹介している、くまくんを主人公にしたいくつかのお話は、最初は一人の子どものためにつくった、オーディオメイトの教材でした（CDのなかにカラーで「くまくんのお話」として入っています）。

その子は、自分の抱えている発達の課題に自覚がありませんでした。ですから、発達の課題となっていることを直接話して聞かせても、よくわからないかもしれない、きっとイライラしてしまうだろうと予想がたちました。

そこで、くまくんというキャラクターを登場させ、くまくんが学習する様子を絵本に見せようと思いつきました。「自分のことではなく、くまくんのことだよ」となれば、興味を持って見てくれるのではないかと、思いました。

これまで、自分のこととなると、「わからない」「気づかない」のに、友だちのことになると、実によくわかっていたり、アドバイスができたりという子を何人も見てきました。ですから、困っているくまくんにも、何かよいアドバイスをしようと考えてくれると思っただけです。また、その過程で、本人も学べるのではないかと、思いました。

つくってみてから、この教材は、他の子どもたち（特に

発達の問題がない子どもたち）にとっても、感情の扱い方や認知に役に立つのではないかと気づき、他の子どもたちにも見せるようになりました。

はじめは、小学校低学年向きのお話だと思っていましたが、高学年の子どもたちも興味を持って楽しんで学んでくれました。高学年には、間接的なだけでなく、より暗喩的な教材なのかもしれません。そして、絵本が大人にも愛読されるように、中学生にも高校生にも使える教材だと思えます。くまくんの話を聞きながら、自分を重ね合わせて、言葉にしないまでも何か感じてくれていることと思います。

また、保護者にも、子どもがネガティブな感情を身につけていく過程についてや、それを助けるかわかり方を知ってもらおうのに役立つように、どのように声をかけると感情面の認知が進むのか、お手本になるようなセリフを意識しました。

かわいいくまくんと一緒に、気持ちについて考えてもらえるとうれしいなと思っています。

二〇一四年十二月

石橋 瑞穂